
令和 2 年度浜田市と島根県立大学の共同研究事業

浜田市における 孤立（孤独）死防止対策

報告書

島根県立大学 吾郷美奈恵

この研究は、浜田市消防本部警防課との共同研究事業である。また、看護栄養学部看護学科 4 年生の原田凧沙、江角彩楓と共に取組んだ。

《 はじめに 》

わが国の、急激な高齢化と単身世帯者の増大が著明となり、単身者の死亡数の純増をもたらすことに加えて、一人暮らしの人が自宅で死亡し、死後発見されるといういわゆる「孤立（孤独）死」を増加させることになり、これが社会的に広く注目を集めている。

「孤独死」という用語は、1970年代より使用されているが、単身者が自宅で死亡発見された事例の新聞記事は、ごく少数ながらも明治期より見られる。阪神淡路大震災後の仮設住宅内で多発した孤独死事例を契機に大きな社会問題となり、政府レベルでの検討・施策に至っている。

市町村による対策は、地域住民や民間団体による孤独死防止活動支援、巡回・訪問など自助・互助・共助・公助によって行なわれている。しかし、地域のつながりの弱さや若い世代の人手不足、支援や関わりの拒否等で支援が行き届いていない、または困難となっているのが現状で、孤独死数は増加しており、更なる孤独死対策の強化が必要である。

島根県浜田市では、孤独死対策として紹介されている活動を、自主防災組織の代表者が役割の一つとして行なっているが、全ての高齢者が支援を希望しているわけではない。死に対する態度や恐怖が高い場合に、自ら進んで支援を希望していることが考えられる。しかし、必要としている支援や頻度は、支援を必要としている側のニーズや、支援者側の体制や考え方によって異なっている。また、支援者のコミュニティ意識の差も、支援の有無やその程度に影響を与えていると考える。

《 目的 》

浜田市消防本部警防課との共同研究事業として、「孤立（孤独）死」を未然に防ぐための方策について検討する。

《 調査方法 》

2つの調査を実施しました。

調査A

対象

浜田市消防職員（116名）

調査内容

- ① 孤独死対策として紹介されている活動の「利用・希望状況」
- ② 日本語版 UCLA 孤独感尺度（第3版）
- ③ 性・年齢
- ④ 世帯形態など

調査方法

無記名自記式アンケート調査

調査B

対象

浜田市自主防災組織代表者（76名）

調査内容

- ① 孤独死対策として紹介されている活動の「実施状況」
- ② コミュニティ意識尺度（短縮版）

調査方法

無記名自記式アンケート調査

《 倫理的配慮 》

調査は無記名で行い、自由意思による協力を求め、提出を持って同意と判断した。なお、この研究は、島根県立大学看護栄養学部の「学生における倫理的配慮」に関する指針に基づき該当看護領域責任者の承認を得て行なった（承認番号 調査A：2020-公04、調査B：2020-公05）。

日本語版 UCLA 孤独感尺度(第 3 版)

それぞれの項目について、あなたはどのくらいの頻度で感じているか
お答えください。

あてはまる番号ひとつに○をつけてください。

	決してない	ほとんどない	時々ある	常にある
1) 自分は周りの人たちの中になじんでいると感じますか	1	2	3	4
2) 自分には人との付き合いがないと感じることがありますか	1	2	3	4
3) 自分には頼れる人が誰もいないと感じることがありますか	1	2	3	4
4) 自分はひとりぼっちだと感じることはありませんか	1	2	3	4
5) 自分は友人や仲間のグループの一員だと感じることはありませんか	1	2	3	4
6) 自分は周りの人たちと共通点が多いと感じることがありますか	1	2	3	4
7) 自分は誰とも親しくしていないと感じることはありませんか	1	2	3	4
8) 自分の関心や考えは周りの人たちにはわからないと感じることがありますか	1	2	3	4
9) 自分を社会的で親しみやすいと感じますか	1	2	3	4
10) 自分には親しい人たちがいると感じますか	1	2	3	4
11) 自分は取り残されていると感じることがありますか	1	2	3	4
12) 他人との関わりは意味がないと感じることがありますか	1	2	3	4
13) 自分のことを本当によく知っている人は誰もいないと感じることはありませんか	1	2	3	4
14) 自分は他の人たちから孤立していると感じることはありませんか	1	2	3	4
15) 希望すれば自分と気の合う仲間は見つかると感じますか	1	2	3	4
16) 自分を本当に理解している人がいると感じますか	1	2	3	4
17) 自分は内気であると感じますか	1	2	3	4
18) 周りの人たちと一体感がもてないと感じることはありませんか	1	2	3	4
19) 話し相手がいると感じますか	1	2	3	4
20) 頼れる人がいると感じますか	1	2	3	4

注) 1, 5, 6, 9, 10, 15, 16, 19, 20 は逆転項目 (評定は 1=4, 2=3, 3=2, 4=1 に換算)

舛田ゆづり, 田高悦子, 臺有桂(2012): 高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度(第 3 版)の開発とその信頼性・妥当性の検討. 日本地域看護学会誌, 15 (1): 25-32.

- 「1点：決してない」「2点：ほとんどない」「3点：時々ある」「4点：常にある」から択一で回答
- 最高 80 点, 最低 20 点で、点数が高いほど孤独感が高いことを示す

コミュニティ意識尺度

連帯・積極性	地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい。
	住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい。
	地域のみんなど何とかすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。
自己決定	地域での問題の解決には、地域住民と行政が対等な関係を築くことが重要である。
	地域をよくするためには、住民がすることに行政の側が積極的に協力すべきだ。
	地域をよくするためには、住民みずからが決定することが重要である。
愛着	いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。
	この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。
	人からこの地域の悪口を言われたら、自分の悪口をいわれたような気になる。
他者依存	自分の住んでいる地域で住民運動が起きても、できればそれにかかわりたくない。
	地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい。
	地域での環境整備は、行政に任せておけばよい。

- 「1：そう思わない」「2：どちらかと言えばそう思わない」「3：どちらとも言えない」「4：どちらかと言えばそう思う」「5：そう思う」の5肢択一
- 問毎に平均を算出し、最高5点、最低1点

《 結果 》

調査Aは、消防職員 116 名のうち、107 名から提出があり（回収率 92.2%）、孤独感尺度の記載が不十分であった 2 名を除く 105 名を分析対象（有効回答率 98.1%）とした。調査Bは、自主防災組織代表者 76 名のうち、68 名から提出があり（回収率 89.5%）、全て分析対象（有効回答率 100%）とした。

1. 孤独死対策として紹介されている活動

この表は、孤独死対策として紹介されている活動を調査 A の消防職員が「利用・希望する」と回答した割合、調査 B の自主防災組織の代表者が「実施している」と回答した割合を示したものである。

「利用・希望する」、「実施している」が 6 割以上を赤字で示したが、自助の「自宅用火災報知器の設置」は、8 割以上が、「利用・希望する」、「実施している」であった。また、「利用・希望する」では、対象の特徴を反映した、自助と互助の項目で割合が高い現状にあった。

一方、「実施している」では、共助の項目が多くあり、地域特性を反映していると思われる。

	孤独死対策	消防職員／利用・希望する	自主防災代表者／実施している
自助	かかりつけ医を持つ	83.8	63.2
	介護サービスの利用	0.0	50.0
	見守り家電の利用	23.8	6.0
	ホームセキュリティ会社の利用	24.8	9.2
	安否確認の電話サービス会社の利用	23.8	16.2
	郵便局の見守り訪問サービスの利用	8.6	5.9
	安心安全カードの利用	22.9	19.1
	自宅用火災報知器の設置	88.6	83.8
互助	近隣住民への声かけ	63.5	92.5
	新聞等の配達や水道等の検針時の安否確認	41.9	19.1
	黄色い旗運動	0.0	7.5
共助	緊急連絡先の登録	55.2	68.7
	民生委員による見守り・声かけ	0.0	73.5
	緊急時のボタン通報器の設置	33.7	26.5
	救急法の講習への参加	47.6	67.6
公助	見守りなどの相談窓口	0.0	27.9

2. 消防職員の孤独感尺度得点

この表は、消防職員の孤独感尺度得点である。44歳以下と45歳以上で比較したが、有意差は認めなかった。また、世帯形態でも比較しましたが、有意差は認めなかった。このことから、孤独感は、年齢や同居している人数との関係は無いと考えられた。

一方、孤独感”がある人がサービスを“利用・希望しない”傾向にあった。

		n	得点	
年代	44歳以下	42	41.1±7.6	n. s.
	45歳以上	63	42.8±10.1	
世帯形態	単独	16	42.8±7.4	n. s.
	夫婦のみ	33	43.6±10.7	
	二世帯	49	40.8±8.3	
	三世帯	7	42.3±11.9	
計		105	42.1±9.3	

3. 自主防災代表者のコミュニティ意識尺度得点

この表は、自主防災組織代表者のコミュニティ意識得点である。得点を赤で示している項目、例えば、愛着の「この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。」は、1.4なので「思わない」と回答していることになり、得点が低い方がコミュニティ意識がある問である。

コミュニティ意識尺度の「他者依存」は低く、「連帯・積極性」「自己決定」「愛着」は高く、今回対象とした、自主防災組織の代表者は、コミュニティ意識が高いことは明らかである。

連帯・積極性	地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい。	4.3±0.9
	住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい。	4.3±0.8
	地域のみなどと何とかすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。	4.1±1.0
自己決定	地域での問題の解決には、地域住民と行政が対等な関係を築くことが重要である。	4.5±0.7
	地域をよくするためには、住民がすることに行政の側が積極的に協力すべきだ。	4.4±0.9
	地域をよくするためには、住民みずからが決定することが重要である。	4.4±0.7
愛着	いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。	4.4±0.8
	この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。	1.4±0.9
	人からこの地域の悪口を言われたら、自分の悪口をいわれたような気になる。	3.8±1.3
他者依存	自分の住んでいる地域で住民運動が起きても、できればそれにかかわりたくない。	2.5±1.1
	地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい。	1.6±0.9
	地域での環境整備は、行政に任せておけばよい。	1.6±0.9

4. 自主防災代表者の居住年数とコミュニティ意識尺度得点の関係

この表は、自主防災組織代表者の居住年数とコミュニティ意識得点の相関関係である。有意な関係にあったのは、赤字で示した2項目で、居住年数が長い程「住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい」と思っており、居住年数が短い程「この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない」と思っていた。

連帯・積極性	地域でのボランティアなどの社会的活動に参加したい。	.213
	住み良い地域づくりのために自分から積極的に活動していきたい。	.273 *
	地域のみならずと何とかすることで、自分の生活の豊かさを求めたい。	.175
自己決定	地域での問題の解決には、地域住民と行政が対等な関係を築くことが重要である。	.065
	地域をよくするためには、住民がすることに行政の側が積極的に協力すべきだ。	-.041
	地域をよくするためには、住民みずからが決定することが重要である。	.087
愛着	いま住んでいる地域に、誇りとか愛着のようなものを感じている。	.084
	この土地にたまたま生活しているが、さして関心や愛着といったものはない。	-.275 *
	人からこの地域の悪口を言われたら、自分の悪口をいわれたような気になる。	.016
他者依存	自分の住んでいる地域で住民運動が起きても、できればそれにかかわりたくない。	.069
	地域をよくするための活動は、熱心な人たちに任せておけばよい。	-.195
	地域での環境整備は、行政に任せておけばよい。	.004

《 まとめ 》

“孤独感”は年齢や同居家族の人数で差はなく、“孤独感”がある人がサービスを“利用・希望しない”傾向にある。また、サービスを“利用・希望しない”ことから、無意識のうちに“孤独感”が高まること推察され、情報弱者となる可能性がある。また、コミュニティ意識には居住年数が関係しており、それぞれの地域でサービスの利用・希望も異なるなど、地域特性が考えられた。

これらのことから、「孤立（孤独）死」を未然に防ぐためには自助では限界があることから、職種や生活様式にかかわらず多様なチャンネルから対人関係が築ける仕掛けにより互助を醸成し、地域特性に合った共助の仕組みをつくることが重要である。

《 文献 》

- 福川康之, 川口一美 (2011): 孤独死の発生ならびに予防対策の実施状況に関する全国自治体調査, 日本公衆衛生誌, 第 11 号, 959-966
- 一般社団法人日本少額短期保険協会孤独死対策委員会 (2019): 第 4 回孤独死現状レポート, 2020-08-13,
http://www.shougakutanki.jp/general/info/2019/report_no.4.pdf
- 厚生労働省 (2018): 平成 30 年 国民生活基礎調査の概況, 2020-11-17,
<https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa18/index.html>
- 舛田ゆづり, 田高悦子, 臺有佳 (2012): 高齢者における日本語版 UCLA 孤独感尺度 (第 3 版) の開発とその信頼性・妥当性の検討, 日本地域看護学会誌, 15 (1), 25-32
- NHK (2018): “つながり孤独” 若者の心を探って…, 2020-08-13,
<https://www.nhk.or.jp/gendai/articles/4164/index.html?1532420176>
- らくらく情報局 (2019): 寂しく孤独死しないために今から始められる 8 つのオススメ対策!,
2020-07-13, <https://rakuraku-info.jp/senior-solitary-death-measures>
- 石盛 真徳 (2009): 大都市住民のコミュニティ意識とまちづくり活動への参加—京都市における調査から—, コミュニティ心理学研究, 13 (1), 21-36
- 石盛 真徳, 岡本 卓也, 加藤 潤三 (2013): コミュニティ意識尺度 (短縮版) の開発, 実験社会心理学研究, 53 (1), 22-29
- 厚生労働省: 孤独死防止対策取組事例の概要, 2020-07-13,
<https://www.mhlw.go.jp/file/06Seisakujouhou12000000ShakaiengokyokuShakai/0000034190.pdf>
- 三輪秀民 (2017): 急増するひとり暮らし高齢者の見守り拒否に関する一考察—西東京市の「ささえあい訪問サービス制度」から浮かぶ見守り制度の課題, 社会事業研究, 56, 52-56
- 森田沙斗武, 西克治, 古川智之, 一杉正仁 (2016): 高齢者孤立死の現状と背景についての検討, 日本交通科学学会誌, 15 (3), 38-43
- 内閣府 (2019): 令和元年版高齢社会白書, 2020-05-15,
https://www8.cao.go.jp/kourei/whitepaper/w2019/html/zenbun/s1_1_1.html
-

田中博子，森實 詩乃（2016）：団地自治会による高齢者の孤独死予防の取り組みに関する一考察，日本地域看護学会誌，19（1），48-54

田中正人，高橋知香子，上野易弘（2009）：災害復興公営住宅における「孤独死」の発生実態と居住環境の関係 阪神・淡路大震災の事例を通して，日本建築学会計画系論文集，74（642），1813-1820

《 謝辞 》

コロナ禍、地域に出ることが難しく、この取り組みも短期間でのアンケート調査となりました。この事業の実施にあたり、浜田市消防本部警防課救急企画係長の宮崎達也様にはひとかたならぬお世話になり、心より感謝申し上げます。

また、アンケートに協力して下さった、消防職員の皆様、自主防災組織代表者の皆様、本当にありがとうございました。